

東日本大震災から五年半が過ぎた。死者は約一万六〇〇〇人、行方不明者は約二六〇〇人。いまだに避難生活を余儀なくされている人は約一四万人にも上る。あの未曾有とも言える被害から、人々の防災への意識は高まり、行政の対策もより強化されてきた。

だが、八月三〇日に、一九五一年の統計開始以来始めて東北地方の太平洋岸に上陸した台風一〇号は、岩手県や北海道を中心に大きな被害をもたらし、防災の脆弱さを改めて浮き彫りにした。

九月二〇日現在で、死者二二人（岩手県二人、北海道一人、行方不明者五人（同一人、同一人）。被害が集中した岩手県では、約四〇〇人が避難生活を続ける。農業や交通網の被害も甚大で、復旧には長期間かかる見通しだ。

岩手県岩泉町の高齢者グループホーム施設「楽ん楽ん」では、入所者九人全員が濁流の犠牲となった。この悲劇は避けられなかったのだろうか。

施設のあった地区には、当日朝から「避難準備情報」が出ていた。文字通り災害に備え、避難の準備を始めるよう求める情報で、特に高齢者や障害者、乳幼児などの「災害弱者」とっては、避難の開始を促す意味もある。施設側は避難準備情報を把握していたが、その意味を正確に理解していなかった。さ

## 台風10号の警鐘

らに、避難マニュアルもなく、避難訓練を実施したこともなかった。当日夕方、川が決壊し、濁流が施設に一気に押し寄せ、入所者は逃げる間もなかったという。

一方、防災の司令塔となるべき岩泉町役場庁舎も機能不全に陥っていた。当日夕方に台風の影響で停電し、町内全世帯や福祉施設などに設けられたインターネット回線を利用したIP電話は使えなくなった。停電時の予備電源も予算の関係で配備せず、住民に危険を知らせる命綱と言えるシステムは崩壊した。避難指示や勧告は出せず、警察への救助要請もできなくなっていた。さらに、県が「楽ん楽ん」近くの川が「氾濫注意水位」に達したことを町に報告したが、町ではその情報は放置されたままだった。「楽ん楽ん」に救助の警察や消防が到着したのは、翌朝だった。

間一髪で避難した高齢者施設もある。避難マニュアルに記載された避難先の公民館へ向かう橋は冠水し、孤立しかけた。だが、その窮地を救ったのは、消防団員だった。団員の手引きで、高台に避難した。団員とは避難訓練などで日ごろから付き合いがあり、施設に救助を呼びかけるため、立ち寄ったのだという。

台風一〇号で学んだのは、本当の危機の際は、行政を当てにできないことがあるという事実だろう。震災を経験し、防災の重

要性を強く感じていたはずの岩泉町できえ、その弱さが露呈した。想定外の大混乱の中、行政がマニュアル通りに動けるとは限らない。いくら避難マニュアルや防災体制を充実しても、想定外のこと起きれば、たちまち機能しなくなる可能性はゼロではない。自らの身は自ら守るということの意識の徹底も大切ではないだろうか。自治体の対策はその強化にも向けられるべきではないか。

震災後、東北大学災害科学国際研究所は、津波や地震、台風などの災害時の避難場所や経路などを記す「みんなの防災手帳」の普及に取り組んでいる。東北・三陸地方に伝わる「津波でんでんこ」を広めようという試みだ。「でんでんこ」とは各自の意味で、大きな地震が起きるとすぐに津波が来るから、その場から自分で高台に逃げろという言い伝えだ。自らの身を守るという意味が込められている。二〇一四年に宮城県多賀城市が全戸配布したのが始まりで、これまでに約四〇〇の自治体で導入されている。

震災から五年半。私たちの中で、その記憶が薄れ、教訓が生かされないままになりつつある。日本の八丈島近海で発生し、いったん沖繩方向へ向かいながらもUターンしてきた台風一〇号。その異例の動きは、震災の風化への警鐘だったのかもしれない。

ハ洋V